

第四回

琉球・中国交渉史に
関するシンポジウム

論文集



秦 国経 氏

糸数 兼治 氏

朱 淑媛 氏

真栄平 房昭 氏



鄒 愛蓮 氏

高 換婷 氏

吳 元豊 氏

俞 玉儲 氏



中国第一歴史档案館前で



中国第一歴史档案館会議室にて

「第四回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム」開催にあたって

沖縄県教育委員会教育長 安室 肇

「第四回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム」の開催にあたり、ごあいさつを申し上げます。

本シンポジウムは、一九九六（平成八）年三月に中国と沖縄県との間で改訂調印された「清代の檔案マイクロフィームの相互交換に関する中国第一歴史檔案館と日本国沖縄県教育委員会との覚書」に基づいて開催されるもので、これまで沖縄と北京で交互に三回開催されています。そのねらいは、日・中両国の研究者が共同して、特にテーマを明清時代における中国と琉球の歴史史料に関する研究に限定し、中国と琉球の歴史的関係について理解を深めることにあります。

本日は、日本側から十三名が参加し、神戸女学院大学の真栄平房昭教授と前沖縄県立博物館長の糸数兼治先生が研究発表を行います。また中国側からは、中国第一歴史檔案館前副館長の秦国経先生をはじめ、五名の先生方の研究発表が行われると伺っております。この機会にじっくりと討論を重ねられ、本シンポジウムが多大の成果を収められますよう期待しています。

ご承知のとおり、日本と中国はこれまで隣国として長い友好の歴史をもっています。特にわが沖縄県の場合は、琉球国中山王察度が洪武帝の招諭を受け入れて中国に進貢してから一八七九年の廃藩置県に至るまで、およそ五百

年余にわたる国家間の正式な交流の歴史があります。その間、琉球は中国との進貢・冊封関係を通じて中国の高度に発達した文化を摂取受容し、独特の王国として発展してきました。

こうした琉球と中国の交渉史の研究に関しては、過去三回のシンポジウムの成果も含めて、多くの日・中の研究者の努力によって、その全容がかなり明らかになってきておりますが、細部につきましては必ずしも十分とはいえない面もあります。本シンポジウムにおいて、日・中両国の研究者が一堂に会し、それぞれ専門の立場から琉球と中国の交渉史についての共通理解を深められることは、日・中両国の学術交流を促進する上で画期的なことであり、きわめて有意義なことだと考えています。

最後になりましたが、本日の研究発表を引き受けていただいた先生方とシンポジウムに参加されました日・中両国の研究者の皆様、益々のご活躍を祈念するとともに、本シンポジウム開催のため諸準備を担当されました事務局の皆様、心からの感謝を申し上げて、あいさつといたします。

一九九七年十月二十八日